

あつた。私等はたゞ、それは涙ぐましい氣持で眺めてゐたのだ。

(三)しかも、上述の如きディレンマに陥つたのは、單に大阪地方の同志諸君のみではなかつた。殊に最近奈良縣に現れた事實、新潟縣地方に擡頭した傾向、茨城縣に於て示された傾向、青森縣および兵庫縣に於ける同じ傾向、北海道、殊に函館に於て示されてゐる傾向、京都に於ける形勢、等々々は明かに同じ事實を反映してゐるものである。

(四)かくて私等、現在は益々潑刺たる鬭争を進展しようとしてゐる全国各地の大多數の同志諸君が、意識的にもせよ、無意識的にもせよ、獨自の指導部をもつ自分自身の恒常的鬭争組織を、即ち政黨を持つことを要求してゐる、と確信するに至つたのだ。

無論、私等のこの確信は、決して私等の一片の憶測や推察から來てゐるものではない。それは、或は同志諸君の中の有力者の打明けた言葉によつて、或はそれとはなしの私等に對する質問によつて、或は既に諸君等の若干部分の表面化し、又は漸次表面化しつゝある行動によつて私等が認めざるを得なかつた現實の事實に對する、私等の認識から歸納されたものである。私等のこの認識は間違つてゐるだらうか？

當面の客觀的狀勢

一

私等は上來の叙述の間に、最近數個月間に於ける我々の陣營の内外の狀勢の變化に屢々觸れて來た。しかも私等は、それを通じて、私等が前節に於てその認識を試みた通りの諸君の衷心の要求——合法的左翼政黨の再建への——の正しさを見た。

今や私等は、諸君と共に、さういふ風に最近數ヶ月間に異常の速度を以て一大轉換を劃した我々の陣營の内外の狀勢が、現在の瞬間に於て如何なる點にまで進んで來てゐるかを論究しなければならぬ。それは、さうすることによつて、現在の瞬間に於て、諸君のその衷心の要求が如何に不可抗的なものであるかと、從つて私等がそれを正しく反映しようとする努力して作つたこの提案が如何に抜き差しならぬ重要性を帯びてゐるものであるかと、一層決定的に闡明され得ると、私等に考へられるからである。

で、この問題に關しては、便宜上まづ私等をして、優先的に發言の機會を持たしめよ。

二

わが左翼陣營は、田中政友會内閣の下に於て、あらゆる鐵火の試鍊を潜り抜けつくして、最

後に四・一六事件を通じて、再度の嵐に見舞はれた。その惨害が如何なる程度範囲に及んだかは、諸君が直接の體驗によつて知りすぎるほど知つてゐることである。

次で間もなく田中内閣は瓦解して、濱口民政党内閣がそれに取つて代つた。だが、實質的には同じく資本家地主の政府以外の何物でもないこの内閣の出現は、我々の眼前の緊張した状態を幾分かでも緩和することが出来ようか？

それに對する諸君の答へは、私等に於て明白に豫想できる。即ちそれは「斷じて否！」である。

問題は、濱口内閣が、從來「反動内閣」の名を獨占してゐたやうに見えた田中内閣よりも、より少く反動的であり得るか否かに繋るのだ。なるほど、この點に關して濱口内閣は、少くとも當分の間は、武斷一遍の田中軍事内閣より幾分か、より巧妙に、たとへば或る程度に社會政策味を匂はした諸施設——社會政策審議會の設置、欺瞞的にもせよ労働組合法や小作法の制定の前觸れ、等々——をひけらかすことなどによつて、多少とも進歩的外觀を繕ふことに成功し得るかも知れないが、しかしその核心に於ては、前行内閣と寸分違はぬ同質のものであることは、いふまでもないことだ。

否、それどころでなく、組閣早々、如何なる犠牲を拂つても對支政策および金解禁問題を斷

乎として解決するといふ決意を公然聲明して大見得を切つた濱口内閣は、田中内閣によつて既に十分に進められて來た産業合理化および帝國主義戰爭準備に向つて、田中内閣以上に、まっしぐらに決然たる巨歩を運ぶに違ひないのだ。

かゝる事態は必然に、少くとも次の如き豫想を我々の上に押しつける。

(一)従前から既に産業合理化の犠牲となつて塗炭の苦しみに呻吟して來た労働者、農民、無産市民、その他一切の被壓迫民衆の生活の窮乏は今後益々増進し、その既に假借なく剝奪に剝奪を重ねられて來た政治的自由は尙ほ一層酷烈に蹂躪されて行くであらう。その徴候は現在すでに隨處に現はれかけてゐる。即ち、現内閣が金解禁の前程として決行することを聲明した所謂「財政經濟の緊縮」は、その觸込みだけで、すでに早くも不景氣への一般的豫想を濃厚にしその下に於て特に工場労働者が、まづ第一着にその直接影響を受け、殆ど絶望的展望の下に於てさへも、大小の争議が、全国各地に續發するに至つた。東京市電の要求提出、東電の争議、沖電氣の争議、横濱市電を中心とする土木、水道、ガス従業員が一團となつての争議、淺野ドックの争議、等々々、一々列擧してゐるは限りがない。しかも、この方面に於て特に注意すべきは、これらの重要な争議に於ける左翼組合の指導権が著るしく減退の徴候を示しつゝあつ

て、そのために労働者諸君の主張・要求が、多くはウヤムヤの裡に葬り去られるが如き、重大なる事態が出現してゐることである。

更に、諸地方の農村に於ては、窮乏のドン底にある農民は、一層激化するであらうことが豫想されるこの秋の立禁、立毛差押を前にして、不安反抗の氣分に浸つてゐる。また各地に於ける一般の無産市民は、不景氣のこの上の深化の掛聲に怯え切つて萎靡沈滞の極に陥り、かくて都市に農村に、或は重苦しい、或は苛ら立たしい空氣が限なく支配してゐる。

しかも、かくの如く労働者、農民、無産市民の生活を犠牲にして行はれる産業合理化は、他方に於てこれらの被壓迫民衆への益々加重する抑壓となつて現はれる傾向は、今後も資本家地主の政權の下に於ては、決して底止することはないであらう。新内閣成立後日尙ほ淺き今日、過去の時代の事例によれば單なる人氣取りの目的のためにも幾分か自由主義的政策の試みのやうなものが行はれてゐようといふやうな時期に於てすら、労働者農民大衆の集會などの場合に於ける在り來りの彈壓が寸毫も軽減されず、またその運動の自由に関する在り來りの極端なる制限が寸毫も緩和されてゐない、といつたやうな諸事實を見よ。

(二)最近東支鐵問題を中心として、露支間に起つた葛藤は、結局それらの兩國間だけの問題たるに止まらず、帝國主義列強の諸般の利害關係がそれに緊密に結びつけられてあることが、

餘りにも敏速に白日の下にさらけ出された。それはまさしく、第二の世界戦争の危険を孕んだ國際政局の基底に隠されてゐる大動搖の浪が、偶々そこに突如としてその一尖端を露出したものである。しかもさうした第二の世界戦争は、太平洋をその中心舞臺とするものであらうし、そしてわが國はその太平洋に面してゐる一帝國主義國である。この事實をわが國の帝國主義ブルジョアジーが今日までに着々として進めて來た戦争準備と結びつけて考へ、更に内閣の更迭が根本に於て帝國主義ブルジョアジーの意圖によつて決定されるものである事實を併せ考へるとき、我々は濱口内閣が幣原外交の名に於て勿體をつけてゐるその對支政策の如何なるものであるかを容易に知ることが出来るのである。従つて帝國主義戦争絶對反對の叫びの下に、生死の戦ひを戦ふことの無産階級的必要性を徹底的に把握してゐる大衆と手を取つて進む我々が、この新出の内閣に對して如何なる態度に於て對抗すべきかは、多言を須ひずして明かである。我國の内外の一般狀勢をかく概観するとき、わが國の無産階級が、この際益々決然として支配階級に對する全面的政治闘争を展開しなければならぬ瀬戸際に追詰められてゐることは、何人にも拒めない眼前の顯著なる事實である。

三

しかも當面さうした必要なる闘争は、一體どこに強力に進展してゐるか？

(イ)わが國の全左翼戦線は、最近の大暴壓の下に容易ならざる一大打撃を受けた。それは今や、如何に擴大強化されるべきかよりも、如何に再建されるべきかを、まづ第一着手の問題として取上げなければならぬやうな、極度に惨ましき状態に陥つてゐる。

かくて全左翼戦線の上に一地位を占めて来たわが勞農同盟も、折角勞農黨時代以來不斷の試練に鍛ひあけられた幾多の精鋭闘士をその陣營の内部に持つてゐながら、しかも全國の戰闘的勞農大衆の熱烈なる精神的支持を克ち得てゐながら、それが曾て一時的に階級的必要を充たすために取つたその現在の變則的形態の故に、今やその形態のまゝでは、最早強力なる闘争を展開することが全然出来ない状態にある。我々は、この事實に對して自己を盲目にしてはならない。一切は、そこから始まるのだ。

では、諸他の「無産黨」は如何？

(ロ)社會民衆黨は、實質に於ていはゆる「ブルジョア第三黨」の地位に完全に顛落してゐる。黨幹部があくまで議會萬能主義、産業平和主義の殻の中に立て籠り、特に今日の段階に於ては

産業合理化および帝國主義戰爭準備に於て、完全に支配階級と協同してゐることは、例によつて例の如しだ。だが、この黨の大衆にして、生活窮乏、自由喪失の増進の趨勢につれて、その意識に於て一步步々左翼化し、次第に黨幹部が小ブルジョアのイデオロギーや、勞働官僚的利益關係によつて行ふ指導方針に不満を感じだしたものの數が、最近著るしく増加しつゝある傾向が見える。我々は特に、この一點を細心の注意を以て見る必要を持つ。

(ハ)舊日本農民黨系の分子は、最早問題にさへならない。

(ニ)日本大衆黨は、現在に於ては實質上舊日勞黨と殆ど同體をなすものであつて、特に舊無産大衆黨系分子と手を別つて以來、幹部の指導方針は、社會民衆黨のそれに合致しつゝある。だが、大衆の一部が近來著るしく左翼化的傾向を示してゐることは、この黨の場合でも注意される。

(ホ)舊無産大衆黨系分子は、頭にてツペンから足の爪先まで、雜誌「勞農」一派の息のかゝつた陰謀團であるかの觀を呈してゐるだけのものゝ如くである。彼等は日本大衆黨から除名されて以來、新黨組織計畫を聲明して来たが、支配階級の彈壓が毛頭加へられないにも拘らず、まだそれをものにしてゐない。彼等は口に革命的言辭を唱へながら行動に於て完全に闘争をサボリ、戦線統一を看板にしながら、實は戦線の分裂再分裂を以て自黨の生命としてゐる如くであ

る。彼等の多くは一種の口舌の雄であるだけに、その實踐と主張との間には萬里の長城が横はつて居る。何よりも彼等の特徴をなすものは、その餘りにも惨じめな無力さ——單に彼等が未だ曾てしたことのない對支配階級闘争に於てのみならず、彼等が奥の手にしてゐるやうに見える陰謀秘策に於てすらもの——である。

(ハ) 勞働大衆黨——新黨準備會解體直後に、支配階級の鼻息に恐れをなして我々の陣營から逃出した水谷、神田君等によつて率ゐられてゐる一握りの黨員たちから成り立つてゐる——以下の地方諸黨は、その性質の點からいへば、社民黨と舊無産大衆黨との間にそれ〴〵の地位を占め、その實力の點からいへば、別に問題にするに足りない。殊に、全國的規模に於ける政治的組織でないから、對支配階級闘争に於て敵に齒答へのする程の強力なる闘争體には決してなり得ない點に於て、決定的な弱點を有してゐる。

四

以上、現在の瞬間に於ける客觀的狀勢の根本的諸事實、更にその狀勢に直面する左翼陣營の現状、およびそれ以外に位置する、いはゆる無産諸政黨の陣列並にその活動狀態を順次に概觀し了つた後、私等は一層痛切に、今こそ我々の陣營が、現在の變則的形態の殻を脱ぎすて、獨自の指導部を持つ一個獨立の政黨として公然の舞臺の上に決然たる巨歩を進め、我々の肩

におかれある階級的任務——我々のみが果たし得る自信を持つてゐる階級的任務——の遂行のために奮ひ起つべき絶對的必要なことを意識する。更に私等は、私等のこの結論を一層強める力のある二三の要點を次に附け加へよう。

(一) 現在全左翼陣營が支配階級の彈壓の砲火の下に未曾有の大慘害を與へられてゐるのは、根本に於ては所謂「戰術上の誤謬」に基くものであるよりは、その極度に眞劍に行はれて來た闘争のためであつた。これに反して、それ以外に位置する所謂一聯の左、中、右の社會民主主義諸黨の對支配階級闘争は、最も高く評價しても模擬戰以上に出るものではない。それは社會民主主義諸黨の本質から來るものである。それ故に、全被壓迫大衆の對支配階級政治闘争は、斷じて社會民主主義諸黨の手に托されるべきでないのである。

我々は勞農黨時代以來、大衆的日常闘争の基礎の上に、あらゆる闘争を政治的自由獲得闘争に集中統一することを、我々の全政治的活動の根本的方針として來た。かくしてのみ、現在の狀勢の下に於て、全被壓迫大衆の解放運動が強力に、現實力に、效果的に進展せしめられ得るものと確信して來た。我々は今尚ほ、この確信を翻すことが出來ない。であればこそ曾て勞農黨の活躍時代には、同黨が合法政黨といふ點に於ては例へば社民黨と全然一致してゐるたにも拘ら

す、兩者の本質の根本的區別の基準が、前者の大众的日常闘争主義と後者の議會主義との對照の上におかれてゐたのだ。今日に於ても、かゝる根本的區別の基準は、我々の陣營と社會民主主義諸黨との間に、單に儼存してゐるといふだけでなく、益々顯著にならうとさへしてゐる。尤も議會主義に見え隠れに追隨してゐるのは、左、中、右の社會民主主義諸黨を通じて、おしなべてさうだといへる。たゞ右翼社會民主主義を典型的に代表する社民黨は、初めから公然と議會主義に徹底した態度を示してゐたが、最近に及んではそれが益々嵩じて、餘り遠くない將來に於ける内閣割込みを夢みて居る如くである。とにかく、この社民黨は早晚、聯立内閣主義に赴くべき必然性を持つてゐる。支配階級もまた、この傾向を助長してゐる。たとへば、新設の社會政策審議會に社民黨から安部、鈴木二氏を拉して來ようといふ提案が閣僚中に持上げられたと傳へられてゐる。それは、結局ものにならなかつたが、しかしその政治的意味が何であるかは自明である。議會主義に終始する一切の社會民主主義諸黨の遅かれ早かれ落行く先はそこだ。

大众的日常闘争およびその基礎の上におかれた政治的自由獲得の闘争經驗の集積を提けて、屹然として全無産階級戦線の上に立つてゐるものは、たゞ我々の陣營あるのみだ。我々は斷じて、この貴重な經驗の集積を腐らせてはならない。否、我々は今こそ、再び獨自の力を以てそ

れを活かさなければならぬのだ。

(二)組合と政黨との交互作用に關する根本問題は、我々の陣營に於ても、理論上實踐上すでに解決済みになつてゐるものといへる。これに關聯して、勞農黨の成立および發展が、いかに農民組合および労働組合殊に——日本労働組合評議會を始め、一切の左翼労働組合——の獻身的努力に負ふところが多かつたかは、今尚ほ我々の記憶に新たなるところである。

ところが、昨年三・一五事件以來、それらすべての左翼労働組合は、全左翼戦線への支配階級の死物狂ひの大打撃の下に慘憺たる被害状態を現出した。特に四・一六事件以後、その被害状態はまさにその頂點に達した。

我々が既に見た通りに、昨今に及んで極めて重要意義のある大小労働争議が、全国各地に於て、益々底止するところなく増加して行く數に於て續發するやうになつた。一般労働者の經濟的窮乏の深化、金解禁の時期の接近、産業合理化の進行、等々々。かゝる諸事實は、益々深刻なる労働争議の、この上の簇出を豫想せしめるに十分である。

まさにこれ、左翼労働組合の最も精力的な活動が熱烈に要求される秋ではないか！ 然り！ 左翼労働組合の確立は、今やわが國の無産階級にとつて、最も差迫つた絶対絶命の必要となつ

て來てゐる。

もとより左翼労働組合の確立は直接當事者たちの渾身の努力にまたなければならぬが、しかし支配階級の彈壓手段が完備に近づいて來てゐる今日、それは大衆的政治闘争の掩護の砲火なくしては絶対に不可能だと思はれる。

同志諸君！ 諸君は、左翼労働組合の確立の目的のためにさうした大衆的政治闘争を組織する緊要の任務を自ら擔當する義務を痛感しないか？

この問ひが肯定的に答へられる限り、我々がこの際擇ぶべき道は、自ら明かだ。即ち我々はあらゆる幻想から自己を自由にして、まづ我々が現實にその任務を效果的に遂行することが出来るやうに、我々の身支度を整へなければならぬのだ。即ち我々は、この際眼前の客觀的状態に照應して、現在我々の活潑なる活動を現實的に不可能ならしめてゐる、我々の變則的組織形態を、決然として一擲し去らなければならぬのだ。

(三)最後に戦線統一の問題が残されてある。

資本の攻勢にラストヘビーがかけられて來て居る今日、無産階級が戰闘的戦線統一を以てそれに答へる必要を持つてゐるといふが如き問題は、我々の陣營に於ては、最早や完全に討論終

結になつてゐることだ。

尤も、それを如何にして實現すべきかの方法に關しては、我々も極めてジクザクな道を通つて來たが、最後に下からの共同闘争による戰闘的戦線統一の主張に歸着したのだ。この主張は、その最も純粹な形に於ては、まづ我々の左翼的指導精神を高く掲げ、その下に於て他黨の大衆との共同闘争を進展せしめ、かくて漸次に我々の指導精神の下にそれら他黨大衆と渾一融合するといふことにある。戦線統一問題を中心としての、我々のかゝる主張は、一方に於ては社民黨の『大右翼結成主義』の主張に對し、他方に於ては舊無産大衆黨によつて實踐的に代表された勞農一派の、いはゆる『指導精神にこだはらざる全無産政黨の合同』——それは曾て勞農黨の一度犯した誤謬が『勞農』一派によつてそのまゝ踏襲されたものに外ならないのだ——の主張に對して、鋭く對立するに至つた。

社民黨の大右翼結成主義の主張は、我々の戰闘的戦線統一のそれとは、まさに對蹠的地位にあるものである。だが、社民黨幹部のその主張にも拘らず、前にも一言した通り、同黨の大衆の益々増大し行く一部分が、現状勢の下に次第に左翼化する傾向を示して居ることは、大いに注意すべき現象である。同じことは、その指導精神に於て次第に社民黨のそれに近づきつゝある日本大衆黨の大衆の益々増大し行く一部分についてもいへる。

これらの左翼化しつつある大衆は、我々が將來共同闘争に於て温き手をさしのべなければならぬ貴重な戦闘的分子である。

『勞農』一派のいはゆる「指導精神にこだはらざる全無産政黨の合同」は、その實行の可能性もなく、また無産階級の見地から見て決して望ましくないといふことが徹底的に證明されて來た今日に於ては、全然問題にさへならない。否、當時にあつても、その主張は勞農一派が時恰かも益々油の乗りかけてゐた左翼戦線の上に分裂の一線を劃することによつて支配階級に迎合し、その代償として無産大衆黨の成立を容易にした、その怯懦な態度をごまかす一種の保護色にすぎなかつたのだ。いづれにしても、全無産政黨合同の實現を、立黨の使命だと高唱して起つた無産大衆黨の短き生涯が、分裂を以て始まり分裂を以て終り、支配階級の彈壓の下にでなく、自己の策動によつて傷き倒れ、今や一握りの「戦術家たち」の一團にまで打ちなされた姿になつてゐるのは、一場の好個の歴史の諷刺だといふべきである。

かくて、戦線統一の問題に關して、無産階級の見地から見て、現状勢下に於ける唯一の正しき行き方である戦闘的戦線統一は、今尚ほまだ解決されてゐない一の課題として残つてゐるのである。だが、この課題を取上げる資格を持つものは、全無産階級戦線に於て、その方面の唯一の経験者である我々の陣營あるのみではないか！

ところが、我々は現在、我々が取つてゐる變則的組織形態の故に、右翼及び中間派諸黨の大衆の左翼に對する熱烈なる精神的支持——我々はそれを、例へば同志山宣の告別式、勞農葬、追悼會、その他度々の我々の選舉闘争を通じて明かに見ることが出來た——を具體的闘争に組織することすら出來なくなつて居るのだ。だとすれば、我々が現在の瞬間に於て階級的に絶大意義ある戦闘的戦線統一の實現に再び猛進し得るためには、我々は是非ともまづ我々の陣營の建直しから出發しなければならないのである。

五

重ねていふ、我々は我々の現實の行動を、如何なる幻想の基礎の上にも置いてはならない、と。

我々はすでに、四圍の客觀的狀勢を概觀した。更に我々はそれに關聯して、我々の主體的條件の現状をも見た。

主體諸條件の現状としては、一般的には全左翼戦線の一應の總括的崩壊狀態が注意され、特殊的にはわが勞農同盟のこの上の活動の通路の閉塞、殊に折角眼さましき政治的自由獲得闘争の過程に於て獲得された貴重な線と、百戰錬磨の功を積んだ幾多の屈強なる闘士たちとをもちながら、現在階級的緊急必要が命ずる諸闘争を遂行することすら出來なくなつた、その悲

境が注意された。

親愛なる同志諸君！ お互ひに、それが如何に好ましからざることによせよ、我々はかゝる現實を直視——然り、大膽に直視しなければならぬのだ。

だが、我々は決して絶望に陥つてはならない。我々には局面打開の自信がある。我々には我々の陣營が持つ貴重な闘争経験と屈強なる闘士たちとを活かして、曾てありし日の如き潑刺颯爽たる闘争を展開する途があるのだ。

それには、我々はまづ、現在我々を活動不能の状態に陥れてゐる最大原因であるところの、現在の變則的組織形態を一舉に棄て去ることから始めなければならぬ。その過去に於ける必要性および重要意義のために後髪を引かれるのは、この際我々が斷然排斥しなければならぬ一種の感傷主義にすぎないのだ。

我々は斷然この舊衣を脱ぎ棄て、我々が今必要とする新衣と着換へなければならぬ。即ち我々は、更始一新、独自の指導部を持つ、獨立の恒常的政治闘争組織を持たねばならぬ。それが、我々の當面の合法的左翼政黨の結成であり、我々が『新勞農黨樹立』といふ言葉で表現してゐるものである。

そして我々は確信する。それこそ親愛なる同志諸君の意識の底に動いてゐた我々の陣營の前

途に關する要求であつて、私等のこの提案は、畢竟それに具體的の聲を與へたものにすぎないのだ、と。

六

だが、我々がかゝる合法的左翼政黨の結成に發程するに當つて、我々は不可避的に或る種の理論上および實際上の疑問に打突かるであらうことが豫想できる。

理論上の疑問とは、

- (一)プロレタリアートの黨は唯だ一つしかあり得ないといふ理論との關係はどうか？
 - (二)この際我々の合法政黨結成への發程は社會民主主義への轉向を意味しないか？
- 等々である。これらの疑問に對しては、後に掲げようとして居る『起り得る理論上の諸疑問への解答』の中に、私等の意見を提出しようとして考へてゐる。で、茲ではたゞ『眞理は常に具體的である』といふ社會的認識上の鐵則を、それに關聯して附記しておくに止める。

七

次に實際上の疑問としてまづ第一着に持上げられるかも知れないと思はれるのは、

- (一)この際我々の合法政黨結成への發程は、從來我々の闘争に關心を寄せてゐた大衆をして

益々右翼化的傾向を辿らしめる機縁となるものではないか？
 (二)この際合法政黨組織の獲得は可能か！
 等々である。

(一)の疑問は、現在すでに相當程度に現はれてゐる我々の陣營に關する一の重大事實によつて答へられつゝある。それは、我々が合法的政治結社としての存在を持つてゐないといふ唯この一點のために、曾て舊勞農黨時代に我々の陣營に潮の如く來り集まるのを常としてゐた全国各地の闘争的勞農大衆が、或る種の政治闘争——たとへば惡稅撤廢運動、家賃値下要求運動、ガス電燈料金等の値下要求運動、等々の如き——に關する一時的必要に迫まれて、心ならずも社民黨や日本大衆黨の如き右翼政黨に應援したり、應援を求めたりする傾向が、——そればかりでなく、時としては地方政黨を作らうと考へたりなどする傾向が——全国各地に於て濃厚に現はれたといふ事實である。現に私等は、最近屢々諸地方の貧農大衆や無産市民大衆の代表者たちから、府縣市町村會などの決議事項の或る種のものに對する反對運動を組織するための相談を持掛けられながら、我々の曾ての組織の失はれた結果、さうした要求に應ずることが出来なくて、徒らに齒齧みをしたこともあつた。かうした場合、大衆は己むを得ず、今言つた方向に就いたのである。従つてそれを「大衆の右翼化」と呼ぶのは、決して當を得た表現で

はない。大衆は當面一日も棄てよおけない闘争を取上げるに際して、彼等が信頼し得る、眞の左翼政黨がないために、さうした手段によつても、或は彼等の要求を戦ひ取り得るかも知れないとの幻影に動かされたのである。これらの大衆は、我々が公然の場面に火の出るやうな強力な闘争を展開すれば、必ず我々の陣營に復歸することが豫想され得る大衆である。現實闘争の場面から段々と遠ざかりつゝ、しかも何ういふ論法に於てとも「大衆の右翼化」を云々するが如きことは、明かに大衆に對する評價を誤つたものである。我々が現實に活潑なる大衆運動を卷起してこそ、大衆は我々の陣營に來り集まるのだ。我々が現實の闘争を展開して見せないところに、大衆の支持が我々に集まる筈はないのである。

のみならず、現在に於ける我々の合法政黨結成への發程は、我々にとつては、消極的に安易な道に赴かうとする意味を持つのではない。我々が強力なる闘争の展開を再び可能にするために合法政黨の組織に立向ふのは、決して退却ではなくて、言葉の完全なる意味に於て進出である。それは曾て無産大衆黨や勞農大衆黨が、左翼戦線の闘争力が今しも充實しようとしてゐた矢先に、それから分裂して行つて合法政黨を組織したのとは、斷然その本質を異にするものである。

(二)の疑問——即ち、この際合法政黨組織の獲得は我々に可能か？ のそれ——に對しては、

我々は「然り！ 闘争を通じて可能だ！」と答へる。

もとより我々は、我々の前途の困難を過少評價しようとしてゐるものではない。我々の合法政黨組織獲得への進出は、曾て無産大衆黨が左翼戦線攪亂の代償として合法政黨の「官許」を得た場合の行き方とは全然反對に、我々の陣營の對支配階級闘争の進展を目的としてゐるものである。のみならず勞農黨時代の我々の眼ざましき政治的自由獲得闘争は、今尙ほ支配階級の記憶の上に新たなことである。さうだ！ 我々の前途には、決して平坦な道が開けてゐる譯ではないのだ。

だが、我々はよし如何に大打撃を蒙つた場合にせよ、單に我々自身の弱點を見るだけに止まつて、そのために、我々の敵が勝利に酔うてゐる瞬間にも或は持つてゐるかも知れないところの、より大なる弱點を注意することを忘れるやうなことがあつてはならない。

一般的見地から言つても、勞働者・農民・無産市民の生活と自由とを犠牲にして強行されてゐる産業合理化が、急速に深化しつゝある支配階級の内在的・外在的矛盾の上に打建てられてゐるものであることは、いふまでもないことである。

それに、當面政權を掌握してゐる濱口内閣にしても、それは決して如何なる内在的・外在的矛盾をも伴はない政府ではない。まづ第一に、同内閣の出現は、民政黨が直接の立合ひに於て、

政友會内閣を倒した結果ではない。で、それは一方に於て金融ブルジョアジー覇權の下に結合してゐる資本家地主のブロックや、樞密院貴族院やに對して少くとも田中内閣並みに左翼運動彈壓の義務を負ふ内閣であると同時に、他方に於て社會政策を匂はした欺瞞的諸施設によつてなりとも、一般大衆をしてその對支政策や、金解禁問題解決などを支持せしめる必要を持ち殊に當面、全国各地方に於て或る不平不満を激發する結果を伴ひつゝある、所謂「財政經濟の緊縮」を、大した破綻なしに遂行するために、何等かの人氣取り政策を試みなければならぬ必要を持つてゐる内閣である。

更に濱口内閣は、その前行内閣が極端に露骨な彈壓政策のために全民衆の怨嗟の的となつた後を受けてゐるだけに、その點に關して、幾分か或る轉換策を講じなければならぬハメにある。そこへ持つて来て、この内閣は衆議院に於ける少數黨の上に立つてゐて、しかもいづれは遠からず來るべき解散後の總選挙に直面してゐる。そこに濱口内閣が反動時代の政府として持つ最も決定的な弱點がある。

濱口内閣が組閣早々、社會運動取締方針に關して、非合法運動には徹底的彈壓を加へるが、合法運動にまで干渉する意志はないといふ意味を聲明したのは、かういふ點から理解が出来る。

もとより我々は、それを表面の言葉通りに解釋することはできない。それは寧ろ、社會主義政黨や改良主義組合に向つて寛大な態度を取つて、一切の左翼運動に對しては依然として大彈壓を續行し、かくして無産階級戦線への分裂政策に最後の仕上げを施さうとしてゐる意圖を表明したものと見るべきである。

それにしても、總選舉を直ぐ前に控へてゐる少數黨内閣が、左翼的だからといつて合法運動をも彈壓するが如き處置には、或る限界があるものとしなければならぬ。のみならず、若し欺瞞的にもせよ、「憲法の常道によつて」との銘を打つて産まれて出た内閣が、合法的結社権を蹂躪することによつて、憲法に明記してある「日本人の權利」を剝奪するには、その内閣が總選舉の際に籠絡する必要を感じてゐる、一般大衆を納得せしめるに足る程の口實を持つた上でのことではなければならぬ。

それでも萬一濱口内閣が、合法政黨としての存立を我々に拒否するといふのならば、その時こそは、我々は絶對絶命の腹を据ゑて、直ちに第二の手段に移るより外に道はないのだ。

かくて、我々がすべての關係事項を考慮しつくした後に必然に到達した結論は、「この際我々が合法政黨獲得に成功し得るか否かは、結局は力の關係によつて決まるのだ」といふ一事である。それ故に我々は、このたびもまた依然として、「闘争を通じて結黨へ」の原則に固執しな

ればならないのである。

だが、我々は、我々が勞農黨時代以來蓄積した闘争的エネルギーと、今でも尙ほ我々の陣營に向けられてゐる廣汎なる大衆の熱烈なる支持とを提けて合法政黨の結成に立向ふときは、我々の努力が早晚成功を以て酬いられるであらうとの自信を持つてゐる。

要するに、我々が「闘争を通じて結黨へ」のスローガンを掲げて火の出るやうな眞劍の活動を續ける限り、新勞農黨の旗が大衆歡呼の渦巻の中に仰がれるであらう日の來るのは、畢竟時期の問題である。然り！ たゞ時期の問題である。

「新勞農黨」の性質任務および組織形態について

一

親愛なる同志諸君！

若し私等の提案の趣旨が幸に諸君の採用するところとならば、我々は時を移さず結黨運動に入らなければならぬが、その際、我々の「新勞農黨」は、如何なる性質および任務を持ち、如何なる組織形態を取るものとして規定されるべきであらうか？

この問題は、いやしくも我々があくまで現實的基礎に立脚して我々の階級的任務を遂行しな

ければならないとする以上、現在に於ける主體的諸条件および我々の四圍の客觀的狀勢の正しき認識から出發して解決されなければならないものである。と同時に、逆に我々の主體的諸条件および四圍の客觀的狀勢の正しき認識は、また、必然にこの問題に對する解決の鍵を我々に與へるのである。否、それだけでなく、私等の確信を卒直に言へば、さうした認識は、我々の政治闘争のための、独自の指導部を持つ恒常的組織としての「新勞農黨」の樹立の不可抗性を、我々の腦裡に深く刻みつけるのである。

それ故に私等は、上來或は過分かと思はれるかも知れないほどの長さにて、現在に於ける我々の主體的諸条件および我々の四圍の客觀的狀勢に關する私等の認識を述べたのだ。それは無論諸君の假借なき批判および修正を経なければならぬのであるが、しかし私等としては、極力正確を期したつもりである。

だが、我々が愈々具體的に「新勞農黨」の組織形態、性質、および任務の規定を取上げる段取りになれば、右の外に尙ほ、勞農黨時代以來の我々の陣營の一切の闘争經驗の結晶ともいふべき綱領・政策・規約、その他の一切の指令・報告・聲明書などの文献が参考資料として用ひられるべきは當然である。そして最後に、この仕事の仕上げは、我々の陣營の内部に於ける大衆的討論によつてなさなければならないのだ。

いふまでもなく、私等の間だけで取りまとめられた意見をして大衆的討論に代位せしめるが如きことは、斷じて許されるべきことではない。それ故に、私等は私等が今手にしてゐる問題についても、決して最後の言葉を言はうとしてゐるものではない。だが、私等は、その最も根本的な要點に關して、一の基礎案といふべきものをこの機會に提出しておくことは、少くとも便宜上の問題として、私等が回避してはならない義務だと考へる。さういふ意味に於て、私等は更に以下の一節を、諸君の嚴密なる批判的検討の下におかうとしてゐるものである。

二

私等は、現在に於ける我々の主體的諸条件および客觀的狀勢に照應して、提議されたる「新勞農黨」の性質・任務・および組織形態に關する根本的諸原則は、必然に次の如きものでなければならぬと考へる。

すなはち「新勞農黨」は――

(一) 勞働者・農民・無産市民・その他一切の被壓迫民衆の利害を不斷に・強力に・現實的に・效果的に擁護伸張するために、大衆的日常闘争主義を全活動の基礎とする。

(二) かくて個々の場面に於ける闘争を、政治的要求にその必然的聯關に於て結び附け、全

闘争を政治的自由獲得闘争に集中統一して強力に展開する。
 (三) 他方、かゝる立場に即して、戦闘的戦線統一の決定的實現に努力する。
 (四) 以上の目的の遂行のために――

- (イ) 完全なる党内デモクラシーの基礎の上に、
- (ロ) 独自の指導部を持つところの、
- (ハ) 恒常的政治的組織を確立し、
- (ニ) 合法的左翼政黨として、公然の舞臺に於ける活動に進出する。

三

親愛なる同志諸君！

かゝる性質および任務を持ち、かゝる組織形態の下に、強力なる闘争を展開し得る『新勞農黨』を大衆の面前に樹立することは、上來縷述した根據から、我々にとつては不可避的な階級的義務であらねばならぬ。しかも、我々がこの際敢然として我々のこの階級的義務の遂行に立ち向ふことには、更に一層積極的な一の深き歴史的意義が伴ふものでさへあるのだ。

勞農黨時代以來、他のすべての『無產政黨』が滔々として議會主義の泥沼に顛落し、『ブルジョア第三黨』への傾向の上を驕足を以て急いでゐる時に當り、我々はそれに一切目も呉れず、あ

くまで大衆の先頭に立ち、大衆と協力しつゝ果敢なる日常不斷の政治闘争を行つて來た。更に、我々がその大衆的日常闘争主義の基礎の上に展開した政治的自由獲得闘争の意義は、最近に於ける客觀的狀勢の急速なる轉換の下に於て、層一層くつきりと闡明されるに至つた。我々がかく我々自身の陣營の建て直しに急ぐのも、畢竟それに基くものに外ならないのである。

尙ほそれに關聯して、我々が長期に亙る實踐の過程に於て終に展開し得た戦闘的戦線統一の方針は、現在日本の戦闘的大衆によつて、階級的に見て正しき唯一の行き方であることが全幅的に承認されるに至つてゐるといつても、決して言ひ過ぎではないであらう。

これらの仕事のすべてに於て、我々の陣營のみが、わが國の全無產階級戦線を通じて唯一の経験者である。もとより、これらの仕事のすべては、何れの一として、まだ完成されてゐるものはない。否、それどころでなく、どれもこれもが、言はずまだ準備的段階にあるものゝみであり、これから大いに進展せしめられなければならないものである。そこにこそ、我々の來るべき任務の中心點がおかれてあるのだ。

我々が勇敢に我々の責任に於てその任務を擔當しようとの決心を固めた以上、我々はそれに相應した恒常的政治的組織を持たねばならぬ。しかも、その組織に於て、我々自身の獨立の指

導部を持たねばならぬ。

だが、我々が大眾と共にある時のみ強く、大眾を離れては全然無力であることを知る以上、我々は、大眾の意志を常に我々の組織の指導部に反映させるための通路を開いておかねばならぬ。そしてそれは、完全なる党内デモクラシーの確立によつてのみ、なし得られるものであることは無論である。

党内デモクラシーについては、我々は決して全然の無経験者ではない。だが、我々の陣營に於ける従來のそれは、少くとも完全なものではなかつたといふことには、何人も異存がないであらう。若しそれが完全なものであつたならば、我々の陣營は或は現在の停頓状態にまでは來ないで済んだかも知れない。

だが、既往を咎めるのは、たゞ將來への参考になる範圍に於てのみなすべきものである以上、我々はその詮索立てに徒らに時間を浪費してはならない。のみならず、我々の陣營が現状に來るまでに我々が持つた闘争経験は、一切の功過を清算した後にも、少くとも非常に意義深いものであつたといふことは、我々は大衆と共に安全に斷言出來ると思ふ。それ故に私等は、茲ではたゞ、この提案に於て提議された新勞農黨の組織形態を決するに際しては、あくまで党内デモクラシーを完備する手段を講ずべきであることを強調しておけばよいのだ。

同志諸君！ 我々の新勞農黨が最終的に樹立されるまでには、我々はおそらく、この上幾多の惡戦苦闘を重ねなければならぬであらう。だが、我々は斷じて絶望的態度に陥つてはならない。我々是我々の陣營の内部に於て、相當に長き過去の闘争経験の集積を持ち、従つて幾多の鍛鍊されたる闘士を持ち、更に、全國の階級的勞農大衆の、熱烈なる精神的支持を持つてゐる。で、我々が固き自信を以て全力的に結黨準備の闘争を續けて行く限り、我々のその努力はやがて成功を以て酬いられるに違ひない。

されば、親愛なる全國の同志諸君！ お互ひに大衆とがつしりと腕を組んで、輝ける前途の希望に勇み立ちつゝ、現在のあらゆる苦難に堪へ、再び勝利への行進に上ほらうではないか！
すべての闘争を政治的自由獲得闘争へ！

新勞農黨組織準備運動萬歳！

起り得る理論上の諸疑問への解答

A 新勞農黨の樹立は「プロレタリアートの黨はたゞ一つしかあり得ない」といふ理論と矛盾しないか？

私等は、さきに「諸君は新勞農黨の樹立を要求してゐる」といふ私等の確信ある認識を述べ

た。その際にも言つた通り、私等のその言ひ方は、或は餘りにも唐突且つ大膽な形式に過ぎたものであつたかも知れない。何となれば、諸君のその要求は、まだ、或る具體的な形を取つて諸君の意識の表面に浮びあがつて來てゐないかも知れないから。少くとも、諸君はまだ、それを公然と發表するまでには至つてはゐないから。

それにも拘らず、我々は諸君は新勞農の黨樹立を要求してゐると斷言した。それは、諸君がよし政黨といふ概念に於てなくとも、とにかく諸君の日常闘争を果敢に進展し得るやうな、何等かの恒常的政治組織を、即ち新勞農黨を持つ必要を、不可抗的に痛感してゐるに違ひないからである。

では、何故諸君は、諸君のその不可抗の要求を公然と主張することを躊躇したか！ その點は私等に十分諒解できる。もし私等の觀察が間違つてゐなければ、それは、諸君の階級的良心がそれを抑へてゐるからである。

階級的良心！ さうだ！ それはたしかに階級的良心であつた。諸君は、必ずやかう考へたに違ひない。即ち「我々は、たしかに我々自身の政治的組織を要求してゐる。だが、それを不用意に公言することによつて、萬一にも、わが左翼陣營の全國的統制を攪亂するやうな結果が招來されたならば、それこそ一大事だ」と。私等はそれを、たしかに、諸君の稱讚に價する階

級的良心の發露だと考へる。

更に諸君は、諸君の新勞農黨樹立への要求が、もしかすると、從來我々の陣營に於て、既に一般化されてゐる一の階級理論、すなはち「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふ理論に牴觸するやうなことはないかとの考慮から、幾分、諸君の要求を公言することを躊躇してゐるに相違ないのだ。

その點もまた、諸君があくまで階級理論への忠誠に終始しようとしたことの證左であると思ふ。従つて私等は、それをも同様に、諸君の階級的良心の發露として、一應は肯定してゐるのだ。

ところで、前の問題は、今となつては既に何等問題であり得ないと思ふが、たゞ後の問題はいまだに未解決の問題として諸君を悩ましてゐるかもしれない。少くとも諸君は、差し當り、この問題の明快なる解答を痛切に要求してゐることと思ふ。私等は、諸君のその疑惑を一掃したいとの切なる希望の下に、それに對する私等の見解を次に提供しようと思ふ。

先づ最初に注意されねばならぬことは、この問題は、この際あくまで、一の具體的問題——我々が當面實踐に於てその解決を迫られてゐるところの——として取扱はれるべき性質のものであつて、斷じて、一の抽象的な「一般原則」上の問題として取扱はれるべき性質のもので

はないといふ一事である。

抽象的一般原則上の問題としてならば「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふやうなことは、無産階級理論上に於て既に討論終結すみの問題である。

だが、或る抽象的一般原則が個々の現實の場合に於て適用され得るものか、乃至もし適用され得るものならば、如何に適用されるべきものであるかは、當該場合の客觀的状態との聯關に於てのみ決定されなければならないものであつて、決して抽象的一般原則がそれ自身の適用性を決定するものではないのである。換言すれば、或る抽象的一般原則が客觀的眞理——マルクス主義的にいへば眞理そのもの——であるか否かは、廣く言へば歴史的に決定されるものであり、より狭くいへばそれが参照されてある現實の場合に於ける具體的な客觀的状態との聯關に於て決定されるべきものである。「眞理は常に具體的である！」

我々の當面の問題は、「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふ理論が、抽象的一般理論として正しいか否か？ といふのではなくて、それが現下の客觀的状態との聯關に於て文字通りに適用されるべきものであるか否か？ といふのである。今少しハッキリといへば、現下の客觀的状態に照應してこの際我々が日本共産黨とは全然別個の我々自身の合法的左翼政黨を持つのが正しいか否か？ といふのである。それは純粹に具體的な問題である。それ

は當面の客觀的状態が不可避免的に我々に課したところの徹頭徹尾具體的な問題であり、更に、兩様の意味に解釋され得るやうな曖昧な答ひを許さない現實問題である。何よりもまづ、この要點が明確に把握されなければならない。

問題がかく提起されてある以上、それへの解答は必然に次の如くなされなければならないのだ。

もし、現下の客觀的状態が、我々の新勞農黨樹立の計畫を階級的に不必要としてゐるやうな性質のものであるならば、我々の行動は、徒に、左翼戦線を攪亂するばかりのものであつて、従つてそれは明かに「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふ理論を故意に蹂躪するところの、許すべからざる分裂主義的・社會民主主義的傾向を代表するものであらねばならぬ。

だが、これに反して、若し現下の客觀的状態が、嚴格に階級的見地から見ても、我々の新勞農黨樹立の計畫を不可避ならしめてゐるものであるとすれば、抽象的一般原則に文字通りに従つては、具體的な客觀的状態に照應して我々がその不可避な仕事を取上げるのは、まさに我々が當然の階級的任務を遂行するゆゑであつて、そのために、よし「プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない」といふ理論が、歪められたやうに見える事があらうとも、我々は

毛頭それにこだはる必要はないのである。日本の無産階級全体の利益は、それによつて進められるだけであつて、少しも損はれるところがないのだ。『具體的事實が抽象的一般原則の適用性を決定するのではなくて、逆に抽象的一般原則が具體的事實を決定する』といふが如き考へ方は、明かに一種の觀念論であり、餘りにも明かに、唯物的辯證法そのものを逆立ちさせてゐるものである。我々はそれをして我々の現實の行動を支配させるべきでは斷じてない。重ねていふ。『眞理は常に具體的である！』

ところで、我々の場合は、その何れに當るものであるか？

この問ひに對する我々の答ひは、既に與へられてゐる。即ち我々は、前に當面の客觀的状態を概觀した際に、それに照應してわが國の無産階級全體の利益が我々の新勞農黨樹立への發程を不可避なものにしてゐることを、可なり詳細に論證しておいた。それ以上、今特に何もいふ必要はないであらう。

我々はこの際、新勞農黨の樹立によつて、現在我々に残されてゐる一切の闘争的エネルギーを最大限度の有效性において活用しようとしてゐるのである。少くとも、現在の我々の陣營は、今こそ一の合法政黨として更生することによつて、その力を數倍にし、數十倍にし得るであらうことは、萬が一にも間違ひのないことだ。

かゝる展望を前にして、現實の客觀的状態を全然無視しプロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ないといふ理論を、何等實踐との聯關なしに、唯だ漫然と振廻はすやうなことは、具體的な現實問題を、抽象的一般原則にすりかへるものである。我々は殊にこの際、さうした無責任な態度を斷乎として排撃せねばならぬ。

我々は最早や、何等狐疑逡巡する必要はない。我々が萬難を排して新勞農黨の樹立に猛進することは、我々の喫緊の階級的義務である！

(因に言ふ。最近仄聞するところによると、現在、日本共産黨被告として獄中にある諸君の中には、現在の日本共産黨を解散して、新たに『合法的共産黨(?)』を樹立すべきことを主張してゐる人々があるさうであるが、無論、我々の新勞農黨樹立の計畫は、それらの諸君の意見とは、何等——理論的にも實際的にも——關係のないものである。この點は、萬一の誤解を防ぐために、特に茲に明記して置く。)

B 新勞農黨樹立への發程は社會民主主義への轉向を意味する處
れはないか？

結論から先きに言はう。「斷じてその處はない！」と。

願みれば、昨年も漸く暮れに近づきつゝあつた頃、まだ新黨準備會が『勞働者農民黨』の結

成に急ぎつゝあつた際に、突如として左翼戦線の一角から、結黨否定の華々しき意見書が投げ與へられた。そしてその中に、次の如き一つの「主張」が書かれてあつた。

「今日の力関係の下に於て作り得られる合法政黨は、社會民主主義の政黨以外のものではあり得ない」。

この「主張」は、それを一項目として持つてゐた意見書の全内容と共に、直ちに我々の陣營を風靡した。

私等も當時は、その「主張」を肯定してゐた。だが、今にして考へると、それは一の大なる誤謬であつた。

この誤謬の根源は、當時——今でもさうだが——私等が、新黨準備會を解體して勞農同盟に轉形して行くことは我々としては正しい行き方であると、先づ最初に私等の根本態度を、さういふ風に決めてゐた事實に關聯があつたのだ。

私等のこの根本態度は、右の「主張」の正否如何を吟味するまでもなく、全然別個の、より重大な——と、當時私等に思はれた——一の考慮から決定されたのであつた。で、私等の根本態度が一旦さう決定された以上は、殊に當時の匆忙裡にあつて、私等は右の「主張」を精細に批判し検討する時間をも、差迫つた必要をも、持たなかつたのであつた。

そのことは兎に角、その誤謬の影響は、理論上、實踐上、決して輕視すべからざるものである。即ちそれは、「社會民主主義の政黨と、しからざるものとの區別の標準は、一に當該政黨が合法政黨であるか否かの上に置かれるべきものだ」とのやうな考へ方を一般大衆に懐かしめるやうな傾向を導き出した。

今、私等は、私等のその誤謬を清算しなければならぬ。そのために、私等はまづ、社會民主主義政黨の本質に關する私等の見解を述べなければならぬ。

この點に關聯して、私等は社會民主主義政黨の本質が歴史的に如何なるものであり來つたかの叙述をする必要を持たない。私等は、私等の當面の目的のためには、社會民主主義政黨が現段階に於て如何なる本質を示してゐるものであるかを語るだけで、事が足りるのだ。

私等はすでに當面の客觀的狀勢の概觀に際して、我國の社會民主主義政黨の幹部諸君が、如何に小ブルジョア的イデオロギーや、勞働官僚的利害關係によつて大衆を指導しようと努力してゐるかを見た。私等はまた、彼等が如何に産業平和主義や議會主義の泥沼に顛落し、更に、その一部が如何に聯立内閣主義——マクドナルド政府タイプの單獨内閣への到達の前程としての——に急ぎつゝあるかを見た。私等は尙ほその上に、彼等が如何に戰鬪的戰線統一の擾亂者としての役割を演じつゝあるかをも見た。最後に私等は、彼等のさうした一切の行動が、如何

に産業合理化および帝國主義戰爭準備への参加に、従つて帝國主義ブルジョアジーとの協同に歸着するものであるかをも見た。

さうした彼等の實際の行動を通じて彼等が演ずる役割——さうしたものは皆、一切の社會民主主義的政黨が現段階に於て持つ本質を指標してゐるものである。それを一言に要約すれば、曰く、「一切の社會民主主義政黨は骨の髄まで帝國主義的である。」

彼等の理論もまた、同じく帝國主義的である。尤も、私等の知つてゐる範圍内では、日本の社會民主主義諸政黨はまだその立場を理論的に表明することに努力するよりも、寧ろそれを隠蔽することに腐心してゐるやうであるが、この方面に於て最も典型的な發達を遂げてゐるドイツの社會民主黨の代表的理論家たちは、その立場を大要は次の通りに理論づけてゐる。

「曾て資本が尙ほ各個の私的資本家の氣儘な自由管理の下におかれてあつた間は、無産階級は「全經濟を社會的に組織せよ」といふ社會主義的要求を押し出す必要を持ち、しかも、その要求に代はるべき他の何物をも持たなかつた。だが、それ以來に於ける資本の獨占制度への發達は、この事態を一變した。それは、獨占的組織の擴大的傾向——その絶頂まで昇りつめた形に於て國家資本主義への傾向——を通じて、無産階級のために利益を齎らすやうになつた。即ち獨占的組織が擴大すればするほど、資本の管理に關する一舉一動が廣汎

なる社會的大影響を及ぼすやうになるから、資本の管理は次第に各個の私的資本家の手から離れて全社會の——國家の——手に移るやうになり、従つてデモクラシーが完全に行はれてゐるところでは「議會」に移ることになるが、勞働者は議會に於て最大多數を占めてゐる譯だから、結局は勞働者の意志が資本管理の方向を決定する主導力となるのだ。」

と、大體かういつた調子である。如何に彼等の理論までが完全に帝國主義的になつて來てゐるかを見よ。

理論的には、まだ多分に改良主義の假面を冠ぶつてゐる日本の社會民主主義政黨の幹部諸君は、まださういふ處へまでは進み切つてゐないやうだが、少くとも右翼の連中は、やがてドイツの先輩たちの足跡を追はざるを得なくなるであらう。

かくて見よ、彼等は如何にその實踐に於てと同じく、理論に於ても帝國主義的であるかを。帝國主義的であらねばならないことを強要されてゐるかを。

この點を、もつと平たく言へば、社會民主主義政黨は、その理論および實踐に於て、勞働者・農民・無産市民・その他全被壓迫民衆の意志を反映してゐるものではなく、逆に資本家地主の——究極に於て帝國主義ブルジョアジーの——意志を反映してゐるものだ。そこにこそ、社會民主主義の政黨を、しからざるものから峻別するための標準がおかれるべきだ。合法政黨である

か否かは、當該政黨が社會民主々義政黨であるか否かを決するものではない。

今、新黨準備會の解體の當否の問題を離れて、單に、新黨準備會が「闘争を通じて結黨へ」のスローガンの下に合法政黨として結黨することに成功したであらう時に、同黨が果して社會民主々義政黨に變質したであらうか否かだけを問題として考へるとするとき、私等はそれに對して、斷乎として「否」と答へる。

尤も、當時新黨準備會が結黨方針を放棄せずに、合法政黨として結黨するには、當時の力關係の下に於て、或る程度の讓歩をしなければならなかつたことは確かだ。そして當時の力關係は、寧ろそこに表現されたであらう。だが、同じく當時の力關係の下に於て、その讓歩は或る狭き限界に止まつたであらう事も、また同様に確かだ。そして、その限界は、決して作られた労働者農民黨を社會民主々義の政黨に變質せしめるやうなことはなかつたであらう。一體、さういふことを——即ち作られた「労働者農民黨」が社會民主々義政黨に變質して行つたであらうといふやうなことを——考へるのは、單に當時の狀態に盲目なためではなく、實に勞農黨以來血みどろの闘争をつゞけて來た全國幾萬の同志たちと、その背後から彼等を熱烈に支持して來た戰闘的大家の闘争精神および闘争力に對する許すべからざる無理解から來るものだ。——同じことが、當面の新勞農黨樹立の計畫の場合についても、正確に言へる。當時私等が、他の更

に重大なる考慮に没頭してゐた間に、無意識の裡にさうした大罪を犯したと同じ結果に陥つたのは、私等としては、實に見逃がせない根本的誤謬を犯したものであつた。私等は今それを、潔く同志諸君と大家との前に清算する。

もとより、あの時新黨準備會が、如何なる種類の讓歩にもせよ、とにかく結黨を可能ならしめるための條件として或る讓歩をして「労働者農民黨」として打つて出たとしたら、それは確かに完全な型に於けるプロレタリアート黨ではなかつたに違ひはない。だが、それかといつて、作られた「労働者農民黨」はその理論と實踐とに於て労働者・農民・無産市民その他全被壓迫民衆の利益の擁護伸張とその自由の獲得とのために必要な闘争を果敢に進めたに違ひないから、それは必然、その本質に於て、資本家地主の——究極に於て帝國主義ブルジョアジーの——意志をその理論および實踐の上に反映する社會民主々義政黨とは、雪と墨の對照を示したにも違ひないのだ。かうした結論は、私等には不可抗である。

しかるに、「完全な型に於けるプロレタリアート黨でないものは皆な社會民主々義政黨だ！——白でないものはみな黒だ！」と言つた論法で今尚ほ私等に詰寄るものがあるとしたら、それは、唯物辨證法をどこかの棚の上に置き忘れて來た、愛すべき（！）觀念論者たちだけであらう。さうした考へ方は、結局、或る意識的目的のために、具體的事實の認識を忘れたものであ

り、更にそれは、例の「具體的事實が抽象的一般原則の適用性を決定するのではなく、逆に抽象的一般原則そのものが具體的事實を決定するのだ」といふやうな考へ方と、結局同じ繩張りの中へ來るものである。

親愛なる全國の同志諸君！

お互ひに不動の自信を以て、闘争を通じて結黨へ進まう！ 我々が労働者・農民・無産市民その他全被壓迫民衆の生活と自由のために、資本家地主の陣營に進軍する限り、我々の結黨への道も荆棘の道であらう。それは、我々には覺悟の前だ。更に愈々合法政黨として一方に屹立するやうになつても、——否、さうなれば一層——彈壓の砲火は依然として我々の上に集中せられるであらう。これも承知だ。我々の合法的舞臺が決して平和の樂園でないことは、我々のすべてが敬愛して措かざる同志山宣の壯烈なる最期がそれを辨明する。お互ひにたゞ個人的安逸を求めぬものならば、この儘無爲に我々の闘争力を腐らせて行くに越したことはない筈だ。だが、それは我々の階級的義務意識が斷じて許さない。全被壓迫大衆の利益は、我々に斷然躊躇なき蹶起を命ずる。聞け！ 今なほ我々の耳底に残る同志山宣の聲は、雷の如く響き、我々に號令して、我々を政治的自由獲得闘争の戰場へと驅立てる。さうだ！ 我等の行くところは

戰場であり、墓場である！

再び私等は叫ぶ。——

闘争を通じて結黨へ！

戦闘的労働者農民萬歳！

新労働黨樹立運動萬歳！

一九二九年八月八日

勞農黨の宣言・綱領・政策

結黨大會宣言

一

過去數年來雨に嵐に互ひに固く腕を組みかはして無産階級解放戦線の上に苦難の行進を共にして來た我々全國の同志は、今や當面の客觀的狀勢の轉換に照應して我が陣營を建直し、新たに勞農黨の旗の下に敢然として勝利への巨歩を踏出すことを誓つて、茲にその代表者を送り光輝ある結黨大會を開き、まづその闘争の第一聲を擧げた。この記念すべき瞬間に際して我々は過去を回顧し將來を展望し、大膽に我々の決心・抱負・確信・豫見を提けて、親愛なる全國の勞働者、農民、無産市民、植民地民衆諸君の前に宣言する。

二

おもふに、過去三年に亙る我が陣營の歴史は、慘憺たる惡戦苦闘の連続であつた。それは、我が陣營がこの短期間に於て再三その名を變へなければならなかつたといふ唯一つの事實によつても證明されてゐる。即ちそれは、最初には勞働農民黨であつた。次には新黨準備會であつ

た。次には政治的自由獲得勞農同盟であつた。今またそれは、こゝに勞農黨の名を帯びて、新たに進出しようとしてゐるのである。だが他方、それにも拘らず我が陣營の實體は、今も尙ほ依然として、勞働農民黨時代以來少しも變らぬ勞働者農民の強固なる戰闘的の同盟である。この實例は怒濤に打たれる巨巖の如く、未だ曾て微動だもしなかつたのだ。若しその間に幾分でも變つたことがあるとすれば、それは單に、後の闘争體が、常に前の闘争體の發展した姿であつたといふことだけであつた。かくして我々は、終始一貫、一難來る毎に勇氣さらに百倍してあくまで不屈不撓の戦ひを續けて來たのである。この勞働者農民の階級的の同盟こそは、我が國の資本主義發達の現段階に於ける必然的の產物である。如何なる障礙もそれを阻止することを得ず如何なる彈壓もそれを破壊する事が出來ないのだ。従つてそれは、今後にかけて尙ほ永久に、脈々として窮まりなき發展を遂げようとしてゐるものである。

三

かくて新たに結成されたわが勞農黨は、決して一朝一夕の急拵への基礎の上におかれてゐるものではなく、實に過去に於ける我々の幾多の闘争經驗の集積の中から生れ出たものに外ならない。舊勞働農民黨時代以來のわが陣營の波瀾曲折に富む闘争經驗が、如何に深刻を極めたものであり、また如何に全無産階級運動に測るべからざる貢獻をなして來たものであるかは、茲

に絮説するまでもない事である。殊に新黨準備會解散後の數ヶ月に互つて、わが陣營が勞農同盟の形態の下に持つた闘争經驗こそは徹頭徹尾慘苦そのものであつた。だが、それだけにまた我々に無限の價値ある教訓を與へたものであつた。我々はその間に「嵐は強き樹をつくる」ことを、文字通りに體驗した。我々は今こゝに更に一進轉して引續き果敢なる闘争に突入しようとするに際し、特に我々がその勞農同盟の下に於て持つた苦難の闘争經驗の重要意義を強調しておく必要を痛感する。これこそが我が勞農黨をして諸他の無産政黨と本質的に異らしめる根本的要素である。

四

我が勞農黨は、本大會に於て正式に決議採用された綱領、規約、政策、組織方針および運動方針を高く掲げて、今やその巨大なる姿を現はした。これら一切の重要文書は我が黨の性質、任務、および組織形態を明確に規定してゐる。かつてエンゲルスが適切に表現した通りに「一の新しき綱領は、常に一の公けに樹てられた旗であり、外界はそれによつて黨を批判する。」かくしてわが黨の綱領および關係文書を見るとき、わが黨が如何に舊勞働農民黨時代以來一貫して變らざる勞働者農民の同盟として立つ者であり、また如何に加速度的に左翼化しつゝある大衆を計画的に組織化することによつて層一層その現實の闘争力を擴充しつゝ、益々廣汎なる新

戦野の開拓のために全力を傾倒しようとしてゐるものであるかを、人は容易に看取し得るであらう。かゝる根本態度に於て今まさにその躍進の第一歩を印したわが労働者は、その全組織、全活動を完全なる党内デモクラシーの基礎の上に置き、百戦錬磨の闘士を網羅して構成された強力なる指導部の下に、大衆的日常闘争を中心生命として、あくまで果敢執拗に資本家地主の堅壘に肉迫しようとしてゐるものである。

更に我が黨が、單にその闘争題目を工場農村に求める事を主眼とするに止まらず、同時にまたその組織的基礎を同じく工場農村に置くことにその主要な努力を向けようとしてゐるのは、無論我が黨の實體である労働者農民の戦闘的同盟の實質的完成を促進しようとする根本精神から出たものに外ならないのである。

五

我々の城砦たる労働黨の新機構は、かくして見事に築きあげられた。我々はあくまでこれを本據として、大衆と固く腕を組んでこの瞬間から次の闘争に乗出し、わが黨の旗の上に輝かしく書き記されたる、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張、労働組合、農民組合の擴大強化、無産階級戦線の統一、政治的自由獲得の大目的に向つて突進するものである。殊に我々は、産業合理化および帝國主義戦争の危機に對す、闘争の上に、我々の全闘争エネルギーを集中して戦

はねばならぬ。

我々は以上の如き決心の下に、従前に百倍する力を以て、あらゆる闘争の場面に労働黨の旗を押し進めようとしてゐるものである。なほ我々が新たに合法政黨の形態を採つたのは、當面の客觀的状態の下に於て、特に必要なる大衆闘争を不斷に強力に捲き起して、労働者農民の戦闘的同盟としてのわが陣營をしてその本來の任務を最も効果的に遂行せしめるために、必然に取らるべき唯一の階級的に正しき道であるからだ。如何なる場合にも、我々の中心問題が無産階級の解放であるといふことには變りはない。我々は我々の現在の立場が階級的に絶対に正しいものであることを斷乎として主張する。現下の政治的反動期に於て、我々の前途が決して寸刻の安逸を許すものでないことは、輝ける我等の同志山宣の壯烈なる最期が既にそれを決定的に證明した。我々はあくまで忠實にこの亡き同志の態度に學び、まつしぐらにその足跡を追うて進軍することを誓ふ。全國の労働者、農民、無産市民、植民地民衆諸君！ 今こそ高く翻る労働黨の旗の下に團結せよ！

労働者農民の戦闘的同盟萬歳！

大衆的日常闘争萬歳！

労働組合農民組合の擴大強化萬歳！

無産階級戦線の戦闘的統一萬歳！
政治的自由獲得闘争萬歳！
労働黨の旗の下に！

一九二九年十月二日

綱 領

- 一、我が黨は労働者・農民・無産市民その他一切の被壓迫民衆の日常利益の擁護と伸張のために闘ふ。
- 二、我が黨は、労働組合、農民組合の擴大強化を重要な任務とす。
- 三、我が黨は無産階級戦線の統一を期す。
- 四、我が黨は全被壓迫民衆の政治自由獲得のために闘ふ。

政 策

- 一、言論、出版、集會、結社の自由。
- 二、選挙法の徹底的改正による十八歳以上の男女の選挙権、被選挙権、大選区區制、選挙の完

全なる自由、獲得。

- 三、地方自治體の完全なる自主化、府縣知事、市町村長其他一切の自治體公職の直接選挙。
- 四、治安維持法、治安警察法、暴力行為取締法、その他一切の無産階級抑壓諸法令の廢止。
- 五、裁判によらざる一切の處罰・逮捕・監禁・家宅侵入の處罰・冤罪竝に不當拘留に對する國家の賠償。
- 六、職權濫用・不當拘束・暴行・凌辱・收賄・官吏の處罰。
- 七、裁判の絶對公開、一般投票による陪審員の公選およびその權限の擴張。
- 八、刑務所および警察署に於ける待遇改善、讀書、面接、運動の自由、豫審終結後の即時保釋と保證金の廢止。
- 九、政治警察竝に機密費の廢止。
- 一〇、財産税、不在地主税、奢侈税の創設、所得税、相續税、地租、營業收益税の免税點引上、以上の諸税の高率累進賦課。
- 一一、戸數割、車馬税その他一切の無産階級負擔惡税の廢止。
- 一二、生活必需品の消費税及び關稅の撤廢、國營及び獨占事業料金の引下げ。
- 一三、團結權、罷業權、團體協約權の獲得。

- 一四、完全なる八時間労働制及び坑内その他危険作業に於ける六時間労働制の即時實施。
- 一五、資本家負擔による週休制の獲得。
- 一六、最低賃銀、最低俸給制の獲得。
- 一七、資本家負擔による失業手当制度の獲得。
- 一八、傷病老廢・労働者・農民・下級俸給者並家に族の生活國庫保證。
- 一九、労働爭議調停法の廢止。
- 二〇、工場法、海商法、海員法、健康保險法の徹底的改正、交通事故特別裁判法の制定。
- 二一、交通運輸、電氣、鑛山、水産、森林、鹽田、土木、建築労働者その他自由労働者の傷害疾病に對する特別補償法の制定。
- 二二、耕作權の確立、立毛・藪及びその他農産物の差押、立入禁止、絶對反對。
- 二三、自作農創定法の廢止、小作調停法の徹底的改正。
- 二四、米、麥その他農産物の強制検査の廢止。
- 二五、肥料、農具、種子の國營並に無料貸與、凶作、違蓋および土地取上の場合における農民の生活國庫保證。
- 二六、官公有並に共有の林野、河川、湖沼及び一切の荒地、不用地の、農民による自由使用確

- 認。
- 二七、農會、産業組合及び漁業組合の廢止、耕地整理法、森林法の徹底的改廢。
- 二八、全兵科に於ける一年現役制の實施、除隊後の職業保證。
- 二九、兵卒の待遇改善、兵卒の人格權保證。
- 三〇、一切の軍務に依る家族窮乏の國家に依る生活保證。
- 三一、青少年・婦人労働者・特別待遇制の獲得、青少年・婦人の徒弟制度の廢止。
- 三二、義務教育機關の増設完備、その年限延長、その費用及び兒童の凡ての給與の國庫負擔。
- 三三、學生々徒の研究の自由および校内に於ける自治權の確立。
- 三四、官制男女青年團、在郷軍人會、青年訓練所の廢止、補習學校の自主化。
- 三五、女子の法律上・經濟上・社會上の差別撤廢。
- 三六、前借その他に依る女子および少年の人身賣買の禁止。
- 三七、國庫負擔による無料宿泊所、無料診療所の全國的設置並にその管理權の獲得。
- 三八、居住權の確立、家賃制限法の制定、無產者住宅の公營、増設及び管理權の獲得。
- 三九、借家法並に借地借家調停法の徹底的改正及び其全國的實施。
- 四〇、民族的・封建的・賤視觀念の差別撤廢、糺彈權の獲得、恩惠的施設反對。

- 四一、植民地民族の解放。
- 四二、祕密外交の廢止。
- 四三、對支干涉絶對反對。
- 四四、帝國主義戰爭反對。



發行所

東京神田今川
小路二ノ一

ア
ル
ス

電話九段三三・三三
振替東京二四八八八番

刷印日 四月八年五和昭
行發日 八月八年五和昭

夫郁山大者著

雄鐵原北者行發
一ノ二路小川今區田神市京東

郎太源本山者刷印
〇四町軒五區込牛市京東

大衆は動く

定價 壹圓五拾錢

刊新最のスルア

著原アレクンシ
譯人健野小・務山陶

宗教信すべき乎

彼等の正體と化の皮を白日の下に
暴露し、一切の宗教を清算せよ。

アフトン・シンクレアは、歐洲大戦當時凡にこの「宗教信すべき乎」原名（宗教の利潤）を書いてゐた。彼は米國の、キリスト教舊教と、キリスト教新教と及び泡沫の如くに出没する諸宗教、宗教らしきもの、正體を、化の皮を、假借する所なく、あばき、ひんむき、さらけだした。而も

その依存する所が資本主義であり、その擁護する所が支配階級であり、その立ふさがる所が科學の前途にあり、その導く所が民衆の永遠の無智の道である事をシンクレアは何等怖れなく、我々の前に明かにした。
豫言者シンクレアの獅子吼を聴け！

錢八料送・錢拾五圓壹價定

刊新最のスルア

著一ラミプツレユフ
譯 渙 永 福

レーニンとガンヂー

現代思想の兩極に立つこの二大
巨人を何んと観るか？

ロシアと印度は、世界的に効果を及ぼす一つの大きな實驗の主題であつて、その成功は世界に例證を示し、この二人の改革者の新しい教義を、全世界に擴げるに違ひないのだ。レーニンとガンヂーは、法悅的信念、即ち彼等の國家が人類を救ふ使命を有つてゐるといふ信念の情熱によつて立つてゐる。従つてこの二人の言説は「福音」の魅力を有つてゐると同時に、一世を攪亂しそれに反撥する傲岸な他の一面をも有つてゐる。實に彼等二人は豫言者のやうに二十世紀の初頭に立つてゐる。
若し吾々が彼等の言説に耳を藉すならば、彼等の時代は世界歴史の新紀元の初頭になであらう。
暴力が無抵抗か？ 権力が愛か？ 機械讚美か？
機械破壊か？ 物質文明か精神文化か？

先づ二大革命家の思想と行動とを檢討せよ

錢八料送・錢拾五圓壹價定

刊新最のスルア

著原トシラユチ
譯俊正松村

改譯
増補

西洋哲學物語

上卷
下卷

人生の背景は哲學である。生活の指標も哲學の上に置かれ一切の神祕も亦哲學に依つて解決される。哲學の人生に對する使命は如斯重大であり密接であり常識的であるべきに拘らず難解とされ一般より敬遠されて來たのは何故であつたか？之れ哲學そのものゝ罪ではなく寧ろ説く人の罪であつた。本書はその陰鬱なる講座より澄冽たる生活の眞中へ新使命を帯びて出現した快著である。行文平易、通俗的にして而も學究的なることは歐米の學者が舉つて奇蹟以上の奇蹟として激賞する處である。有史三千年來の眞理は本書に依つて初めて親しく萬人の把握する處となつた。久しく絶版中の處今回全々改譯増補の新版として更めて出現したものである。

錢拾各料送・錢拾五圓壹各價定

刊新最のスルア

著原クツベ・スムダア
譯夫芳野永

東洋哲學物語

上卷 出來
下卷 近刊

有史五千年、神祕を藏せる東洋思想の探求は今や全世界を舉げて人類永遠の相をここにこそ發見すべく盡されてゐる。

西洋の物質文明は既に行き詰つた。世界思想の根源こそ實に「光は東方より」だ。ギリシヤに於けるプラトーンも、如何にインド思想の影響をうけたことか！近世ローマンチックな哲學、文藝が如何にその「自我」の思想をインドより享けたか！西洋文化そのものが世界最高のアリア民族より出たことか！いかに多くの世界人がインドの思想宗教に救はれたことか！さうだ！そしてその思想と宗教とがいかに科學的であることよ。人々はそこに最高の思想面を見出し花よりなほ華かに咲く譬喩、そして生死超越の眞理をそこに見出したことであらう。

錢八料送・錢拾五圓壹各價定

刊新最のスルア

露西亞は果して

地上の樂園か？ 現實の地獄か？

現在のサウエイト・ロシアをユートピアと見る人も、地獄と見る人も、本書に描き出された生々しい生ける事實に直面するの勇氣を必要とする。本書の著者は革命直後の露西亞を視察し、又最近國賓として招かれ、露西亞の真相を究めた某氏の匿名であつて、世界の疑問C・C・C・Pの正體を忌憚なく暴露した空前の快著である。

C^{エス}・C^{エス}・C^{エス}・P^{エル} (サウエイト社會主義共和國聯邦)

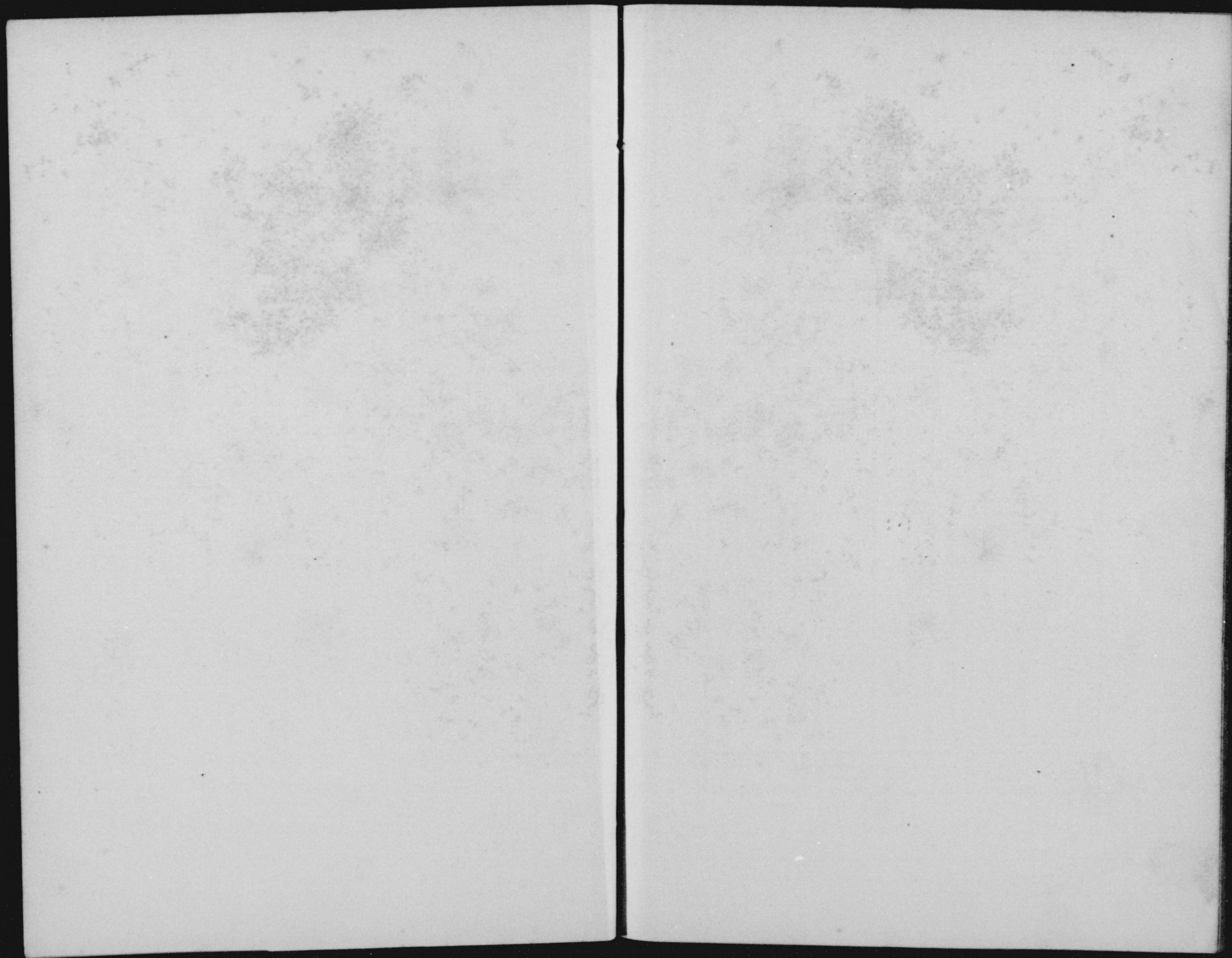
他和律著

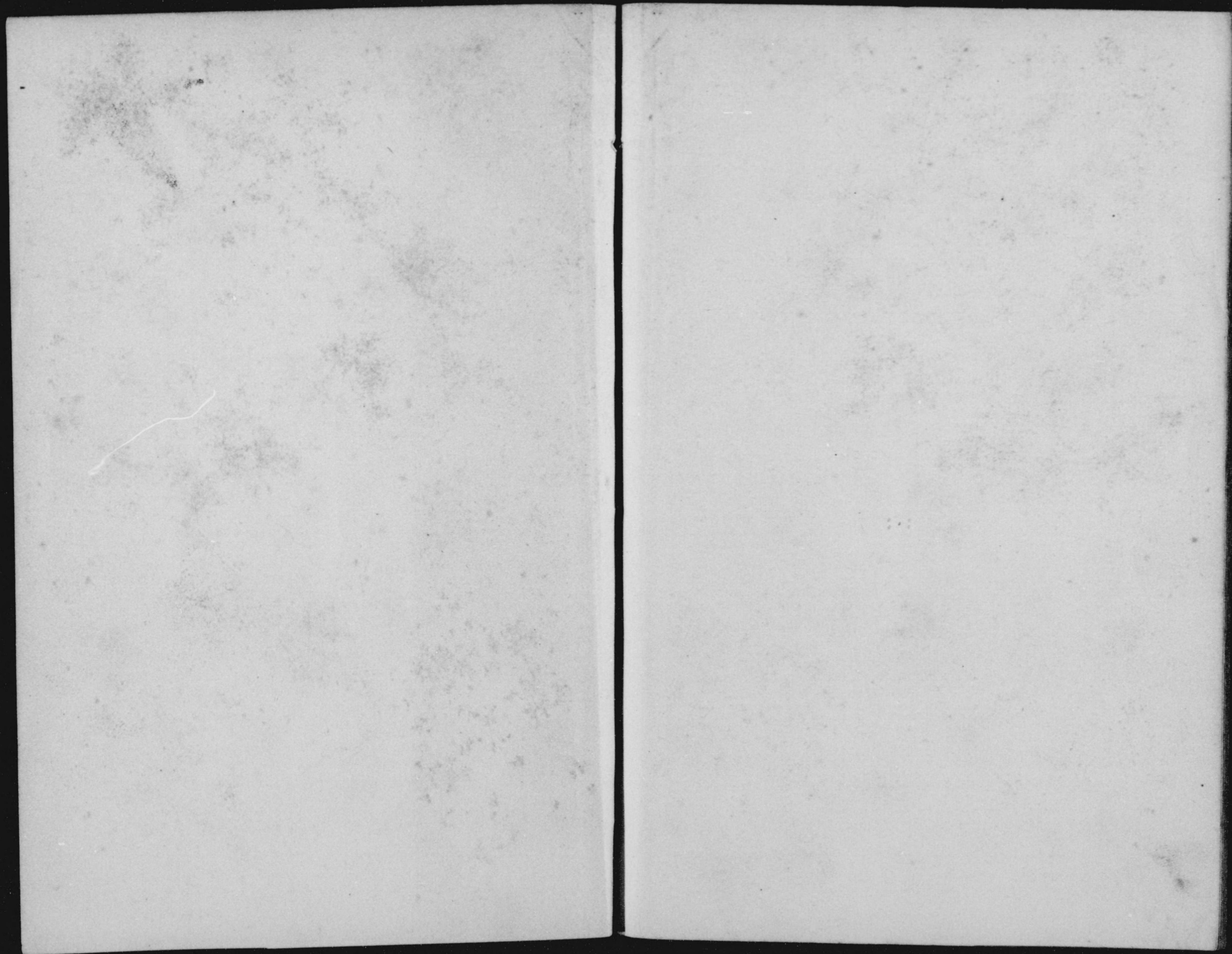
「C・C・C・P」とは何か？ 暗號でも陰語でもない。
 勞農ロシアの略語である。

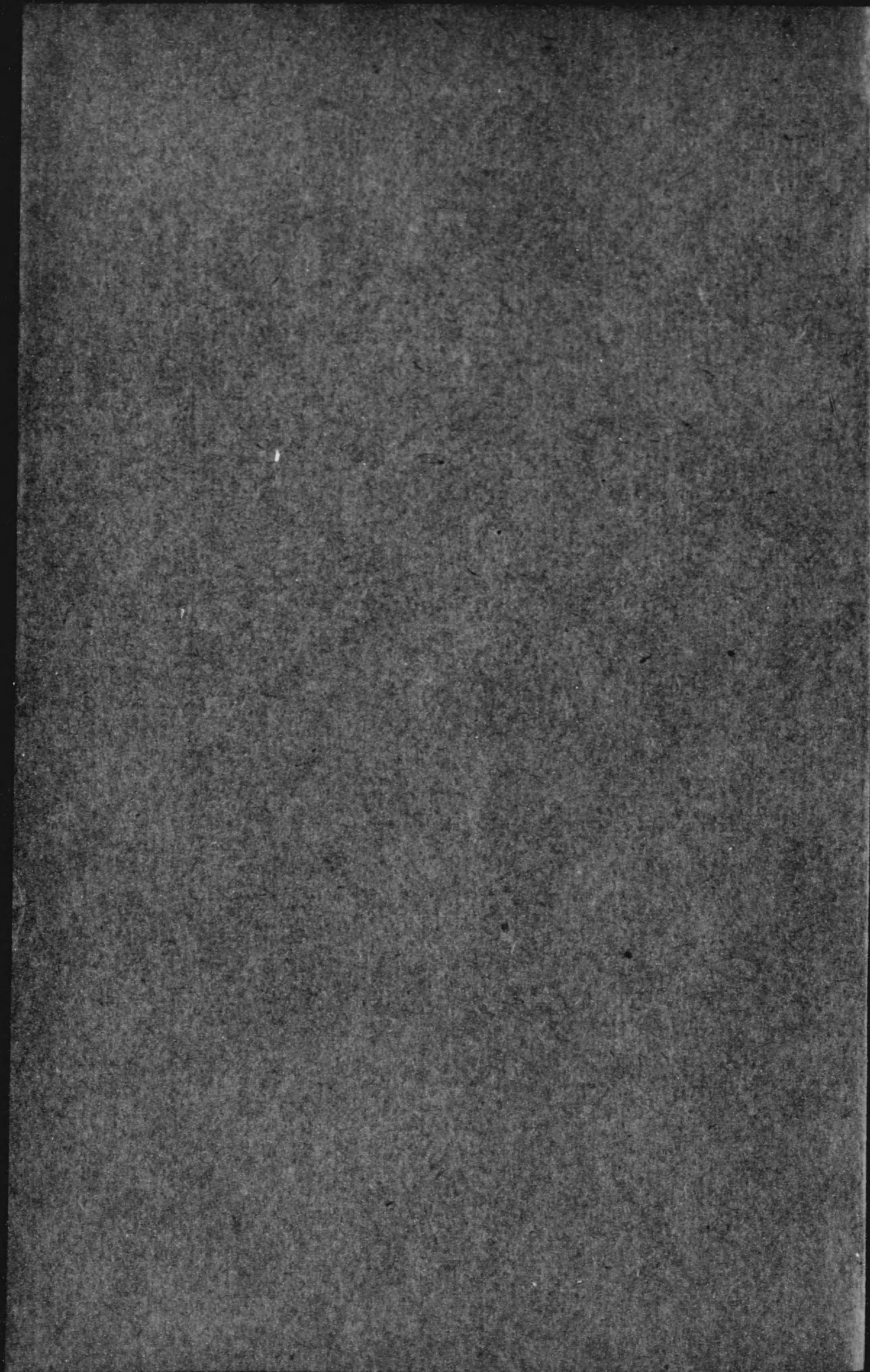
第一のCは「聯邦」第二のCは「サウエイト」第三のCは「社會主義」そして最後のPは「共和國」つまり「サウエイト社會主義共和國聯邦」の意である。

本書に收めた無数の寫眞版は、殆んど初めて發表された著者秘蔵の蒐集だ。

錢八料送・錢拾五圓壹價定







586
307

